

111. 最近の滋賀県下における 発掘調査の紹介

その3

18. 弥生～古墳時代の複合遺跡

今津町弘川字高田 高田館跡

高島郡今津町に位置する高田館跡遺跡は、高島バイパス建設に伴い調査した結果、弥生時代～古墳時代にかけての複合遺跡であることが判明した。『高島郡誌』に記載される高田宮内太輔橘義忠が嘉吉年間（1441～1443）に居住したといわれる館跡を想定していたが、それに伴う遺構・遺物は確認できなかった。

調査の結果、弥生時代の竪穴住居跡2軒・方形周溝墓1基と古墳時代の古墳3基・土壙墓一基を検出する。1号竪穴住居は一辺約7mの方形であり、時期は弥生時代後期頃と考えられる。4本柱をもち、南壁中央付近にピットを検出し貯蔵穴かと思われる。2号住居は、径約5mの円形であり、時期は弥生時代中期後半と考えられる。中央には焼けた面をもつピットを確認し炉跡と思われる。方形周溝墓は一辺約14mの方形で溝の四隅が浅くなっている。溝は舟底状をなし、南辺と東辺部の溝の底面上より多量の遺物が出土し供献されていたものと考えられる。時期は弥生時代中期後半と思われる。1号墳は径約8mの円墳である。主体部は中央に確認し木棺直葬と思われる。副葬品は鉄器・須恵

器を各1点出土する。周溝内からも須恵器の坏や壺を数点出土する。2号墳は径約11mの円墳である。主体部は木棺直葬と考えられ、その大きさは掘り方が幅2m、長さ5mほどであり、棺は幅70～80cm、長さ3.5mほどである。副葬品は西小口付近に鉄鏃、東小口付近に須恵器（坏7組・短頸壺1組・提瓶・壺・樽形甕・平底壺各1点）などを出土する。周溝内からも甕の破片がまとまって出土している。あるいは、それらの出土する付近が凹んだ位置に符合することなどから周溝内埋葬が考えられる。3号墳は径約9mの円墳で、周溝の南半分は消失している。古墳の時期は6世紀中頃～後半と考えられる。このような3基の古墳は石田川右岸の平野部に形成された弘川古墳群として理解していきたい。（財滋賀県文化財保護協会 神谷友和）

19. 棺台を設けた横穴式石室

高島町音羽 音羽古墳群

高島町南部は比良山系の北限に位置する。その内に嶽山をいただいた音羽村の背後に音羽古墳群が所在している。音羽古墳群は、6世紀後半から7世紀を中心とした横穴式石室を有する群集墳である。

今回調査した古墳は、従来知られていた音羽古墳群より東南に位置する場所より発見され、字名が石穴と呼ばれているところから音羽古墳群石穴支群と名づけた。石穴支群は従来の音羽古墳群とのあいだには小田川が流れており地域として区別されていたようである。

現在、古墳の数は40基以上と推測される。石穴支群

としては16基確認した。調査対象は7基である。7基の古墳は全て、江戸時代（後期～幕末）に新田開発の為、乱掘されている。現状としては、棚田の状況であり、古墳として明確に確認するのは、はなはだこんなんである。7基の古墳を確認できたのも、多くのトレンチ調査によってかろうじて、石室の基底部を検出できたことによる。7基の古



高田館跡 第2号墳主体部



音羽古墳群 石穴支群10号墳

墳は全て横穴式石室であり、1基が両袖式であり、他は片袖式である。築造時期は6世紀後半から7世紀である。床面の敷石施設は3基であった。墳丘については全て取りのぞかれていた。特異な施設としては、1基の奥壁近くに棺台と推定される平石を検出したことであろう。棺台の規模は最大長155cm、最大幅80cm、厚さ30cmである。棺台の検出例は中国大陸や朝鮮半島には見られるが、日本の場合は少ない。棺台や棺床について、北九州を中心とした装飾古墳にはすこし見受けられる。

(高島町教育委員会 白井忠雄・谷本 博)

20. 新庄城の様相明確に

新旭町新庄 新庄城跡

新庄城遺跡は、高島郡新旭町新庄に所在する。調査地の立地は、高島南部平野の中央を流れる安曇川の左岸にあたり、標高92mの平地で、調査以前はゴルフ場・工場・水田であった。

新庄城は、創建に所説があり詳細が不明であるが、天正元年(1573)に織田信長の家臣である磯野丹波守員昌が高島郡内の支配を目的として入城し、天正六年(1578)に大溝城(高島町)に移るまでの6年間の短期間、居住したことが知られる。

調査は国道161号線バイパス(高島バイパス)の敷設に関連するもので、昭和57年6月29日から11月20日までの約5ヶ月間実施した。

調査では、堀・石列遺構・土塁状遺構・石組井戸・土坑群・石敷遺構・集石遺構・土塀等が検出され、輸入磁器(青磁・白磁・染付)、国産陶器(信楽焼・越前焼・常滑焼・瀬戸焼)をはじめとする16世紀代の中世遺物が出土した。

調査は、今後も継続しておこなわれる予定であり、さらに詳しい新庄城の様相と性格が明確にされよう。

(財滋賀県文化財保護協会 宮崎幹也)



新庄城跡 土塁状遺構

21. 石庖丁形木製品を発見

新旭町針江 針江遺跡

針江遺跡群は新旭町の平野部に立地する。この遺跡の調査は建設省の実施する国道161号線バイパス工事に伴い実施した。今回の調査区域は針江中遺跡と針江北遺跡である。以下各遺跡について説明する。

〔針江中遺跡〕本遺跡で検出された遺構は、土壇、溝、ピット群等であった。その内特記されるのはナスビ形着柄鋤の出土したSK-3と土壇の北東隅より東に延びる溝を伴うSK-8があげられる。それらの時期については土壇内出土の須恵器(直口壺、甕等)、土師器(甕)から考えてSK-3、SK-8とも5世紀末頃と思われる。

〔針江北遺跡〕本遺跡からは掘立柱建物跡、土壇、井戸、溝、ピット群などの遺構が検出された。

掘立柱建物跡は計3棟で1は桁行3間、梁行2間、2は桁行2間、梁行1間、3は東西2間、南北2間の総柱。

井戸は長軸110cm、短軸80cm、深さ50cmの曲物をもつもので外周に4本の柱穴を確認した。

溝1は9世紀後半から10世紀初頭頃のもので須恵器(杯身、杯蓋、皿等)、土師器の杯がまとめて出土した。2は幅6m、深さ40~50cmで溝内から弥生時代末から古墳時代初頭にかけての多量の壺、甕、高杯等と木製品が出土した。木製品の中には守山市川中遺跡出土の木庖丁(石庖丁形木製品)と同様なタイプの木庖丁が1点出土している。

(財滋賀県文化財保護協会 尾崎好則)



石庖丁形木製品

22. 奈良時代の土馬

新旭町木津 栗屋田遺跡

栗屋田遺跡(仮称)は、高島郡新旭町の北端、木津地区の西方に位置し、標高100m前後を測る饗庭野台地の低丘陵上に立地している。昭和57年度より実施される木津地区団体営ほ場整備事業に先立って発掘調査を実施した結果、竪穴住居跡・掘立柱建物・溝・土壇等の遺構が検出され、奈良時代を中心として古墳時代後期から平安時代の遺物が出土した。掘立柱建物は都合12棟検出されたが、全容を明らかにできなかったものや時期が下ると考えられるものを除けば、全てが倉庫形式の建物である。これらの倉庫群は遺物の出土状況から8世紀代にさかのぼる可能性が強く、現段階ではクリヤという小字名や木津の歴史地理的条件から、当地域の貢納物資である白米を保管、管理していたもの

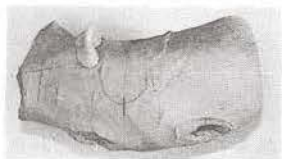
と考えているが、今回は第8調査地区SD10と呼んでいる溝から出土した土馬について紹介したい。

出土した土馬は土師質で、頭部・四脚・尻尾を欠損する胴部だけのもので、現存体長16.8cmを測る。中空で尻部に長径4.5cm、短径2.7cmの長楕円形の孔、頸部下方に2cm×3.5cmの長方形の孔が穿たれている。四脚・尻尾は胴部・尻部の接合箇所にそれぞれ直径0.5～1.5cm、0.5cmの孔が穿たれていることから、棒状のものを差し込んで焼成前に接合されたと思われる。頭部についても焼成前に接合されたのであろう。細部の表現方法は、鞍の前輪・後輪のみ粘土紐で表現し（前輪のみ現存）、他の馬具やたてがみ・体毛等はへら状工具による線刻で表現している。馬具は、手綱・尻繫・障泥・鐙（力革が表現されており、間接的に鐙を表わしている）等が両側面に表現されている。

今回出土した土馬は、中空で写実的な近江的な古式土馬であり、小笠原好彦氏による編年の第1段階B形式に相当するものである。本町では本遺跡の西方に位置する波爾布神社境内より、土馬がもう一体出土しているが、表現方法が本遺跡例と異っており、これが時期的な違いによるものか、また他の理由によるのか今後の課題と言えよう。また土馬の出土したSD10は、一辺約8.5mの方形に囲っていた溝が、対角線上で切られたようなプランを持っており、これが本来の姿なのかあるいは方形であったのかは不明であるが、いずれにしても焼土やまとまった柱穴が確認されなかったため住居跡に伴う溝とは考え難く、また土馬以外の遺物がまったく出土していないことや地形的にも不合理な溝であることから、土馬に係る祭祀（本例の場合は祈雨祭祀と考えている）のおり特別に設けられた可能性があり、このことについても今後の課題と言えよう。

（新旭町教育委員会

図司高志）



土馬

23. 多量の木製品出土

近江町長沢 奥松戸遺跡

表面観察によると方一町の寺域をもつとされる寺院跡の存在が考えられていたが、今回の調査ではそれに直接関連する成果は得られなかった。

東西にのびる土川にそった低地の水田部分では、耕作土下に青灰色粘土層がひろがり、その下に弥生時代後期から古墳時代にかけての包含層（スクモ層）が確認された。このあたり一帯は湧水・浸透水が非常に多く、調査の上で大きな支障となったが、そのかわり遺物の残りが良好で、木製品・自然木が多量に出土した。



奥松戸遺跡

土器は非常に豊富である。目下整理中であるが、湖北地方の弥生時代末から古墳時代の土器編年において貴重な資料といえよう。近江型の受口状口縁甕はもとより、東海地方のS字状口縁甕・ワイングラス形の高杯、北陸地方の月影期の二重口縁甕等他地域との接触を示すと思われる器種も含まれている。

また、古墳時代後期に位置付けられる須恵器の坏身・蓋、有蓋高杯、横瓶、提瓶等が大木の根の周囲に散乱した状況で出土している。

木製品としてはナスビ形農具、竪杵、ゲタ等があり自然木も多い。

竹林等の未開墾の台地状部では西半分が後世の擾乱をうけているもようだが、下層から弥生時代末～古墳時代の土器が出土し、溝状遺構が検出された。その上には、平安時代後期頃の土器を伴う遺構面が見られ、2間×2間の総柱の掘立柱建物が4棟分検出された。柱穴は径30cm余りの円形の小型のものである。

また、これらとは別に土川沿いに耕作土下より、竹樋による暗渠施設が6本ならんで検出された。竹を角材によって連結し、周囲を青灰色粘土によっておっている。地元の話によると明治時代くらいまで使用していたらしい。

1983年度も引き続き奥松戸遺跡内を調査する予定である。遺構が層位的に重複しており遺構検出が極めて難しいが、遺跡の広がりや今回の遺構等の性格を追求する上で今後の調査の成果によせる期待は大きい。

（財文化財保護協会 吉田秀則）

24. 堂跡下層から石室や住居跡

米原町枝折 三大寺跡

三大寺遺跡は、従来より、米原町大字枝折小字寺尾及び塚原の地先において瓦の出土することが知られており、付近に寺院跡の存在することが推定されていたものである。しかるに、このたび小字塚原地先において団体営は場整備事業が計画されることとなり、事前に発掘調査を実施する必要が生じた。調査の対象は

塚原のほぼ全域、約 20000㎡にわたり、東端に位置する塚原古墳をも含む範囲である。調査の結果、周知されていた塚原古墳以外に、新たに、同じ横穴式石室を持つ2基の古墳を発見したのははじめ、古墳時代後期の竪穴式住居跡3棟以上、白鳳時代の堂跡(基壇)1棟、平安時代末期の掘立柱建物跡13棟を検出している。竪穴式住居群は堂跡の下層にも分布するとともに、塚原古墳群と時期的に並行するものである。塚原古墳群は7世紀中頃までの追葬が認められ、従って、6世紀後半から7世紀中頃まで、少なくとも小字塚原付近で集落とこれに伴う墓地が存在していたことが知れる。堂跡は基壇を残すのみであったが、基壇四周より多量の瓦が出土した。伴出した土器類から7世紀後半に位置付けられる。古墳時代の集落跡が基壇下層にも及ぶことから、堂建立に際して集落が廃棄された可能性が強い。堂跡は遅くとも8世紀初頭に廃絶しているようだが、以降付近の土地利用はなかったようであり、平安時代末期になって、再び、掘立柱建物による集落が営まれている。なお、塚原古墳群からは多量の副葬品とともに、人骨が非常に良好な状態で出土し、被葬者の構成を知る貴重な資料を得ることができた。

(滋賀県教育委員会 田中勝弘)

25. 渡岸寺の寺域を想定

高月町渡岸寺 渡岸寺遺跡

県営ほ場整備に伴う調査で、国宝十一面観音像有名な伊香郡高月町渡岸寺のすぐ東側に遺跡は位置する。調査は水路計画部分のみ行い、寺院に関連する遺構検出が予想されたが、ほぼ6世紀～7世紀代にかけての集落跡であることが判明し、竪穴住居3軒と掘立柱建物群および溝等が見つかった。ただ渡岸寺寄りのほぼ南北に走る溝はかつての渡岸寺の寺域の東限を示すものとも考えられる。これと「寺前」等の寺に係る字名・水路・道路とを考え合わせると、ほぼ現在の渡岸寺と重複して一町半四方程度の寺域が想定される。なお瓦については条里溝埋土中から3片出土したのみ



渡岸寺遺跡 II区竪穴住居跡・掘立柱建物跡

であった。(滋賀県教育委員会 用田政晴)

26. 古墳～平安時代の集落跡

栗東町高野 高野遺跡

栗東町高野字五反田の宅地造成(3000㎡)予定地における事前試掘調査で、3時期の遺構が検出され、57年7月より12月まで全面を調査した。その結果、10世紀～11世紀代の掘立柱建物9棟以上と土壇等および、6世紀後半の溝、古墳時代初頭の方形竪穴式住居14棟を発見した。

掘立柱建物の柱間は2.2m～2.5mを測り、最大規模のもので6間×7間以上で、4時期にわたる重複があり、5間×6間、5間×5間とどれも比較的規模の大きいものである。その他、2間×4間南北廂付のもの、2間×5間のものもある。これらとはほぼ同時期の遺構として、土師皿数十枚とともに皇朝十二銭を埋めた小ビットが数か所あり、さらにそれらが建物外の区域に集中する。皇朝十二銭は延喜通宝がほとんどで、他に承和昌宝3枚が出土した。他に土壇2基があり、ともに良好な遺物を多数出土した。

6世紀の溝は3条検出されたが、不整方向に流れ、分流しており性格は明らかでない。また、同期の他の遺構も見られない。

2次遺構面の方形竪穴住居は14棟検出され、どれも良好に残存する。深いもので床面まで60cmで、平均的には40cmのものが多い。最大のもので8m四方を測り、小さいもので4m四方である。規模の大小の組み合わせによる分類は可能であるが、切り合うものが見られず時期差は現在未整理のため不明である。この竪穴式住居(SH-9)より小型仿製鏡が出土しており興味をひく。床面上の炭化物層の上面から出土しており若干の問題は残るが、当遺跡の近くには三角縁神獸鏡を出土した前期古墳の岡山古墳があり、墓域と住居域の関連のなかに、この投棄された小型仿製鏡が位置づけられる可能性があると思われる。

(栗東町文体事業団 平井寿一)



高野遺跡 方形竪穴住居